

21. 板なんば・桶なんば

ドタでは足が沈まないようイタナンバ(板なんば)を履いた。冷たい時はオケナンバ(桶なんば)。ドタの農業には欠かせない広い意味での田下駄である。

板なんば

A の板なんばは長さ 22.5cm、幅 22.7cm のほぼ正方形の板を横目に使い、足を左右と後ろから囲う枠を付ける。枠の手前には紐穴があり B のように踵を後ろ枠に付けてから紐でくくる。幅 23cm では足同士ぶつかる。「足を広げて歩かなあかん」(鳥飼八町)。ウネダの田刈りは、足が煮え込まんように(めり込まないように)、ゴム靴に板なんば履いてウネの上を歩いた。板なんばは、大工さんが作った(鳥飼)。

雪国のカンジキとは親戚

江戸時代後期の『農具便利論』(1822)には C のように「がんじき」という名で出ている。カンジキ・ガンジキとは雪沓の下に履く、つるや木の枝で作った輪の粹のことだが、佐渡ではカンジキをナンバという。田下駄とカンジキとは兄弟関係のようだ。

ナンバの語源は南蛮？

ナンバの語源について『改定総合民俗語彙』(1955)は「名の起りは南蛮で、やはり近世の珍しい発明を意味するのであろう」と解説している。田下駄の歴史は古いので近世江戸時代の発明とするのは苦しいが、語源の「南蛮」は動かないだろう。

ナンバという言葉は古代～中世には見当たらず、ポルトガル人渡来後の近世語であろう。ということは、摂津市域で沼地がドタとして全面的に水田化されるのは、江戸時代になってからであるということ、ナンバ(南蛮)という呼称は語っているのではないか。

桶なんば

D はオケナンバで、底の長径 28cm、短径 22cm、口は長径が 22.4cm、短径 16cm で、やや上ですぼまった楕円形の桶作りの筒である。水の深い田ではツナヌキ(綱貫)を履いて桶なんばを履いた。綱貫だけでは冷たいからである(鳥飼)。

E F は『農具便利論』(1822)、足桶と言ひ、冬の大根洗いにも使っていた。

ツナヌキ(綱貫)

G は『農具便利論』(1822)に出ているツナヌキ(綱貫)。牛馬の革で作ったもので冬の朝早く起きて耕作に出るにも足が凍えないので仕事はかどる。農家の他、京・大阪では魚売り、八百屋、馬方から町家の丁稚にいたるまで、寒中には草鞋を履かず、もっぱら綱貫を履いたと言う。綱貫は「曽我物語」にも見える。鎌倉武士の軍用必需品。

A



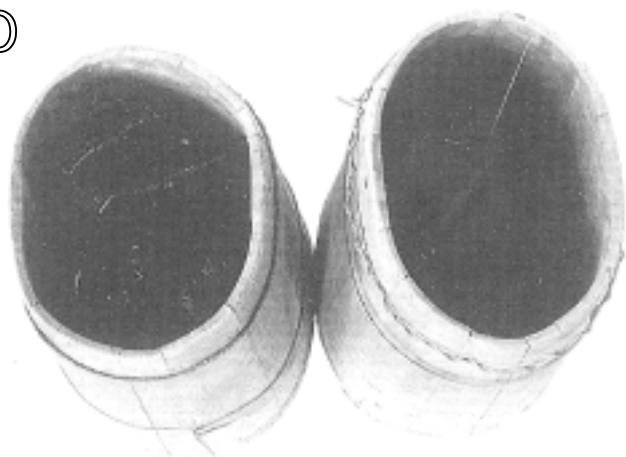
B



C



D

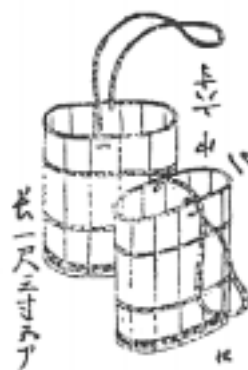


G

つるねき
綱貫
縁と表を以て
くも入いふた
牛舌の草と
うて敷に



E



長一尺三寸五分

۱۰۰۰

芝罘

冬林ぶう大元
とうと徳久、用

